

木下尚江の政治否定の思想

——政治からの「超脱」と「生命」——

園 辰 也

一、はじめに

主に明治時代の後半に、当時の言論、文学、社会運動の各方面で活躍したキリスト教社会主義者の木下尚江（一八六九—一九三七）は、明治三〇年、郷土の松本において普通選挙運動を立ち上げると、同三五、三八年の二度にわたり衆議院議員選挙に立候補し、そこでも普通選挙の実現を訴えた。また、明治三二年から毎日新聞記者となった彼は、その後同社を退社する明治三九年七月までの期間、盛んに当時の政府の不正や政治家の腐敗を糾弾し、政治の改革の必要を説き続けた。このような活動の経歴からは、明治三〇年代の木下が政治に対して強い関心を示していたことがわかる。

ところが、毎日新聞社を退社した明治三九年の半ばを境に、木下が記した文章の中には、それまでの自身の活動のあり方に対する反省の言葉が見られるようになる⁽¹⁾。そして、同年一〇月に彼

は、従来の生活の一切を放棄して、群馬県伊香保の山中に居を移し、そこで自身の半生録である『懺悔』⁽²⁾を著した。その中には、「人の世が政治的に救われ得るものと思つて居たことの浅劣を、今更ら慙愧に堪えない」（四・一三九）という政治に対する深い失望を滲ませる言葉が見られる。それ以降、彼は徐々に厭世的傾向を深め、明治四三年に静座法の指導者である岡田虎二郎⁽³⁾に出会つてからは、長い沈黙の生活に入る。つまり、この時期の木下は、政治に対する消極的ないし否定的な態度を次第に強めていくのである。

本稿は、明治三九年半ばを境とした、このような木下の政治に対する見方の変化の内実を、思想的に明らかにすることを目的としている。その際、本稿では、足尾鉾毒問題の終局に位置する谷中村破壊事件との関わりが、この変化にどのように影響しているのかに注目する。

二、明治三九年半ば以前の政治観

この時期の木下の政治に対する見方を明らかにするためには、彼がキリスト教をどのように理解し信仰したかを知る必要がある。というのも、明治三〇年代の彼の精力的な言論活動や社会運動を動機づけているのは、彼が聖書を通じて独自に理解し受容したところのキリスト教だからである。その彼固有のキリスト教の内容は、彼がキリスト教徒となった経緯を語った昭和十二年九月九日の平野義太郎宛書簡によれば、『マタイによる福音書』第六章一〇節にある「御心が行われますように、天におけるように地の上にも」⁽⁴⁾という主の祈りの一節を、キリスト教の「真髄」(一九・三六五)と位置づけるものであった。この一節を彼は、現実社会に理想世界⁽⁵⁾を実現せよという教えとして理解し、この理解に基づいてキリスト教を信仰した。そのことは、「野生の信徒」と題された文章において、彼が「神の存在」と「神の愛」に対する信仰に加え、「天国を地上に経営するを以て人類の本分なることを信ず」という一条を自身の信仰として掲げたことから明らかにである。「二五・四七」こうしたキリスト教理解は、彼の著作中に度々示される。

例えば、明治三十六年の「青年伝道者の起らざる所以」⁽⁶⁾という文章には、以下の一節がある。

世の多くの宗教家は現実をはなれて宗教を説くを常とし、基督教に於ても亦確に或者は此流を汲むものである、然れども私の信ずる基督教は決して此の如きものではない。聖書は私に教えて、天国を地上に形造れというこれが即ち私の基督教である。此地上に生存してゐる間に天国を此地上に建設することが基督教の信仰ならば未来のことのみを思うのは其本分の大半を忘却したるものといわなければならないと思う。基督教の目的が果して此地上に天国を建設するにありとせば基督教は経済界をはなれてその存在の実を保ち難い。……社会問題は宗教を思うものの一日も忘却することを得ざる問題であつて社会問題のうちに宗教問題は包含せらるるものである(二〇・四三〜四)

ここでは、彼の理解するキリスト教が、「天国」という理想世界を現実社会において実現することを目指すものであると規定され、その立場から、現実社会における人々の経済生活とその結果として生じる諸々の社会問題こそが、宗教家にとって緊要な問題でなければならぬと主張されている。また、明治三十七年の「教育ある信徒の教会に無頓着なる理由」⁽⁷⁾と題された論説においても、「霊的生活」を「肉的人生」に実現することが「宗教の目的」であるから、「社会問題は最も切実なる宗教問題」であると説かれている。(二六・三一三〜四)

そして、こうした特異なキリスト教理解・信仰を持つ木下にとって、社会に広範かつ多大な影響を及ぼす政治という作用は、特別な意義を有するものであった。というのも、彼は上記の理想世界の建設を、政治的過程を通じて、漸次的かつ平和裏に達成されるべきものと考えていたからである⁽⁸⁾。例えば、明治三八年の「日本国民の使命」⁽⁹⁾という論説には、「吾人は天父の大経綸に則りて地上の経営に協力すべき也、『地上に於ける天国の建設』、政治的努力の責任と欲楽と、吾人始めて其の真意義を覚悟することを得たり」(四・二二七)という一節がある。ここでは、「地上に於ける天国の建設」が「政治的努力」と言い直されており、さらに、その政治という事業の崇高な意義に対する自覚が強調されている。

また、明治三九年一月の「平和とは何ぞや」⁽¹⁰⁾という文章には、「吾人が政治を尊貴するは即ち是れが為め也、吾人が政治家を敬重するは實に是れが為め也、道德的世界の建設是れ即ち政治の眼目にして、政治家は實に其の指導者なれば也」(四・二六二)という一節がある。ここからは、木下にとって、政治が理想世界の建設に不可欠な過程であったこと、そのために彼が政治に強い関心あるいは期待を寄せていたことがわかる。

ところが、彼のこうした積極的・肯定的な政治観は、明治三九年から翌年にかけて展開したある事件を通じて、根本的な転換を迫られることになる。その事件とは、足尾鉾毒問題の終局に位置

する谷中村破壊事件である。

三、明治三十九年半ば以降の政治観

木下は毎日新聞記者として東京での生活を始めてから間もない明治三三年二月、初めて鉾毒被害地の視察に赴いて以来、足尾鉾毒問題と密接な関わりを持ち続けた。その関わり方は、単に新聞記者としてこの問題を報道するというにとどまらず、被害民に対する慈善活動への参加などを含んだ極めて活発なものであった。また、この関わりの中で木下は、最も大きな影響を彼に与えた人物であるといっても過言ではない田中正造とも出会っている。そして、「革命の真個の生命を僕に教訓して呉れたものは足尾鉾毒問題である」(四・二〇三)という言葉からもうかがえるように、この関わりは、彼の思想を明らかにする上で欠かすことのできない重要性を持つものである。

ところで、この足尾鉾毒問題とは、古河鉾業が経営する足尾銅山から有害物質が流出したことで渡良瀬川流域の環境が汚染され、地域住民が多大な被害を受けた公害問題であるが、明治三五年以降、その性格は大きく様変わりする。その変化は、渡良瀬川下流域の谷中村を廃村、貯水池にすることで、渡良瀬川の氾濫とそれに伴う鉾毒の拡大を抑制するという計画が、政府により発表されたことから始まる。この計画によって、従来の被害民らによ

る「鉱業停止」の請願運動が分断され、彼らの間に利害の対立が生じた。すなわち、計画の当事者である谷中村民が当然ながら反対した一方で、他の被害民らは、氾濫によるこれ以上の損害を避けるために、この計画に賛成したのである。木下によれば、田中正造はこれを「鉱毒問題を治水問題に塗り変える銅山党の姦策」とであると唱え、これに対する抵抗運動を「暴政に対する憲法擁護の爲め」と位置づけることで世論を喚起しようとしたが、それに対する反応は冷やかで、谷中村民らと田中は他の被害民からも次第に孤立していったという⁽¹⁾。こうして、それまでの公害としての足尾鉱毒問題とは別に、谷中村という一農村をめぐる村民らと行政の対立という新たな問題が生じる。そして、この対立はその後、明治三十九年から翌四〇年にかけての、行政による谷中村破壊に発展する。これが先ほどから述べている谷中村破壊事件である。

木下は、このような鉱毒問題の変化の中で、当時の政府に対する批判的態度を次第に強めている。というのも、公害としての鉱毒問題の時期には、政府は鉱毒流出の事実を把握しながら、十分に可能なはずの対策を怠ってきた職務怠慢⁽²⁾のために非難されるべきものだったが、谷中村破壊事件においては、政府はそうした消極的な罪の故にではなく、国民の迫害者としての積極的な罪の故に非難されるべき存在として立ち現れてくるからである。

谷中村事件当時の木下の政府に対する批判がいかに激しいも

のであったかは、明治三十九年六月に書かれた「政府暴悪の一例」⁽¹³⁾という論説からも明らかである。ここで木下はまず、「是れ決して一村落の問題に非ずして、日本全国を襲いつつある暴政の偶々此の一少地方に著しく凝結したるに過ぎざれば、吾人は我説者に向て、決して之を等閑に付し給わざらんことを切望せざらんばあらざる也」(四・三〇五)と述べ、谷中村破壊事件が、一村落到限られた局地的な問題ではなく、各地で行われている行政府による横暴な権力行使のあり方を象徴的に示す国家的な問題であることに読者の注意を喚起している。

そして、谷中村破壊の手續きに関する、行政の明らかに故意による法律の不正な適用を逐一指摘した上で、彼は以下のように言う。

若し斯の如くんば法律の存在は、法律の皆無なるよりも更に危険也、政府は法律の武器を逆用して国民を残害すれば也。

然り目前政府は即ち是に非ずや。(四・三一三)

ここで言われている「法律の存在」あるいは「法律の皆無」とは、同時に「政府の存在」あるいは「政府の皆無」ということを含んだ表現であると考えられる。なぜなら、引用の後半からもわかるように、「法律」の存在はそれ自体で危険なものではなく、それを悪用して国民の利益を侵害する「政府」の存在があるから

こそ危険なものであると捉えられているからである。ただし、注意しておくべきは、引用の最後の一文に「目前政府」とあることからわかるように、この言葉があくまで当時の政府を念頭に置いたものであつて、行政という作用一般を、あるいは行政を含めた政治そのものを指して述べられたものではないということである。つまり、この言葉は、当時の政府ないし当時の政治の現実を否定するものではあつても、政治そのものをも否定し去るものではないのである。

しかし、本稿の冒頭に述べたとおり、この年の一〇月に著された『懺悔』には、「人の世が政治的に救われ得るものと思つて居たことの浅劣を、今更ら慙愧に堪えない」という政治そのものに対する失望を強く滲ませる言葉が見られるようになる。そして、この傾向は、明治四〇年の六月、最後まで立ち退き命令に従わなかった谷中村の一六戸の村民に対して、政府が遂に家屋破壊という強制手段に出るに及び、より鮮明になる。

木下は、事前に通告されていた破壊期日の前日の六月二二日、谷中村に入り、田中や村民らと合流し、実際には二七日から開始された家屋破壊の現場にも立ち会つてゐる。この日から約一週間をかけて一六戸の家屋の全てが破壊されたのである。「臨終の田中正造翁」⁽¹⁴⁾という回想録において、木下はこの期間の田中の心境について、「其の壮嚴さ、其の痛ましき、是れは到底僕のような粗末な筆に描くことは出来ない」と述べた上で、家屋破壊の過

程についても、「僕は一切を略して、其の戸主の名と其の破壊の日取とをのみ記して此の記事を終わる」と述べ、具体的な描写を避けている。「(一・一二五〜六)ここからも、木下にとつてこの出来事が、名状しがたい、衝撃的なものであったことがうかがえる。

そして、木下は谷中村の家屋破壊後間もない明治四〇年八月、社会主義者の荒畑勝三が著した『谷中村滅亡史』に寄せた「序」に、次のように述べている。

谷中村の滅亡は政治というものの本来性を尤も明著に尤も露骨に説明したるものと存候政治の形式の君主専制なると封建制なると近代の立憲制なるとを問わず政治の実質は人類の一面たる権力欲望の魔性の発動に有之只だ其の手段の古代に在りては武力という直接掠奪に依りたるもの近世に至りて法律という複雑なる間接方法に変化したるに過ぎざることとは歴史の明証する所にして学者の是認する所と存候

(一七・二七五)

ここでは、時代や制度の別を問わず、あらゆる政治権力に潜む暴力性に対する不信が表明されており、明らかに政治そのものが否定されている。こうして、往時の彼にとつて理想世界建設のための高貴な事業と位置づけられた政治の意義は、完全に失われるに

至った。

だが、このような政治観の決定的な転換が、もし、谷中村に対する政府の容赦ない破壊行為を目の当たりにしたことのみによるのだとしたら、そこにはいささか論理的な飛躍があるように思われる。というのも、政府の措置がいかに過酷なものであったとしても、そうした政治の現実に対する批判は、そのまま直ちに政治そのものに対する否定へと結びつくものではないはずだからである。

また、すでに本稿のはじめに触れたとおり、木下は当時の政府ないし政治の現実に対する批判を、谷中村事件以前から継続的に行っている。例えば、彼は『毎日新聞』紙上において、特に藩閥政治家の代表である伊藤博文と、その伊藤が憲政党（旧自由党）の勢力を取り込んで立憲政友会を組織する際に暗躍した星亨の二人に対して最も激しい批判を行っており、伊藤に対する批判は、例えば明治三十三年の「伊藤侯に呈す」⁽¹⁵⁾や明治三四年の「非立憲的思想」⁽¹⁶⁾に見られ、また星に対しては、明治三十三年の「公盜の巨魁」⁽¹⁷⁾と題した連載記事で鋭い批判を展開している。

このように、当時の政治のあり方に対する批判が、明治三〇年代を通じて精力的に展開されていたことを踏まえると、谷中村事件によって高まった政治の現実に対する批判が、政治そのものの否定へと直に結びついたと考えることは、一層難しくなるように思われる。というのも、そう考える場合には、同種の批判が明治

三〇年代を通して継続的に行われていたのに、なぜ、谷中村事件以前には、それが政治そのものの否定へと転換しなかったのか、という別個の疑問が生じることになるからである。したがって、谷中村事件における行政府の暴力的な活動が、木下の政治の現実に対する否定的な見方を、以前より一層強める契機となったことは確かであるとしても、そのみが、彼を政治そのものに対する絶望にまで至らせたと見ることは、なお慎重を期する必要があるように思われる。

ここから、彼が政治の現実にとどまらず、その様々な可能性への一切の期待を捨て去るに至った背景には、さらに別の事情があると考えることもできるだろう。本稿では最後に、その点に関して考察したい。

四、政治からの「超脱」と「生命」

先述の通り、木下は、行政側により事前に通告されていた破壊期日の前日である六月二二日に現地入りしているが、それは実は、村民らが抵抗のため非常の手段に出るのではないかとひそかに懸念したためであった。ところが、彼はそこで、そのような懸念が全くの杞憂であったことを知った。というのも、彼ら村民たちは、家屋破壊を目前に控えながら、麦を打ち、魚を釣り、平然として日常の稼業に従事していたからである。木下はこれを見て、

「崇厳の感に打たれて数々落涙した」（一七・二七六）とあるように深い感銘を受けている。

その理由は、「破壊の前夜」⁽¹⁸⁾という記事に記されている、この日の晩の村民らの寄合における木下の次の言葉からうかがい知ることができる。

嗚呼、諸君は大なるものを学びたり、実に貴重なる大なるものを学びたり、国家政府法律、即ち権力は今の世界が依て以て我が生命とする所にして、而して諸君は実に権力の生命に非ずして死滅なることを学びたり、生命を得んと欲するものは権力に超脱せざるべからず、而して諸君は既に其の域に達せんとするなり、（一七・二八〇）

この文章によれば、木下が村民らに深い感銘を受けたのは、彼らが、長年の苦心惨憺の末に、今日の社会を維持・発展させるために必要不可欠なものと目されている政治権力が、実は人を「死滅」に追いやるものであり、「生命」を得ようとするれば、人はその権力から「超脱」しなければならぬと悟り、行政による強制破壊という終局に臨んで、彼らがその「超脱」の境地に達しえたからであった。だが、この文章からだけでは、政治権力からの「超絶」や、それによって得られる「生命」がいかなるものであるのか判然としなない。

そこで次に、先述の『谷中村滅亡史』に寄せた「序」の一節を見ることにしよう。

彼等の間に共通の生命は則ち労働の自信力なりと小生は観取仕候彼等は何れも自己の双腕に依りて其の田を求め其家を建てたるものに候……我が汗を以て得たる田畑は彼等に取て最早田とか畑とか屋敷とか言える単純の物質に非ずして実に血と涙の最愛なる恋人に御座候彼等十数戸の農民が脅喝欺騙あらゆる政府の悪手段に耐えて其の生活を継続したるもの実に此の恋人と終始を共にするの大精神に候わずや（一七・二七六）

この文章によれば、「生命」は「労働」という言葉と密接に関係しており、その「労働」とは、農民たちが自己の双腕だけに頼って田畑を耕し、家を建て、大地との間に、単に所有者と所有物という物質的な関係を超えた「恋人」のような紐帯を形成することであった。ここから考えると、彼がその「労働」と相即するものとして位置づけた「生命」とは、「労働」を通して得られるこの人と大地との間の「恋人」のような紐帯そのものを指すのではないだろうか。

さらに、引用の後半部分からは、木下が、政府のいかなる計略にも屈することなく黙々と日常の稼業に従事する谷中村民たち

に触れることで、彼らと大地との結びつきの強さをまざまざと感じ、彼らが最後まで政府の命令に従わなかったのは、田中が世間に向って称賛したように「暴政に対する憲法擁護の爲め」(二〇・一九八)ではなく、ただ「恋人」である大地と運命を共有せんがためであることに思い至ったことがわかる。

ここから考えると、村民たちが家屋の強制破壊に臨んで到達したとされる「超脱」の境地とは、政治に対する期待や関心を一切捨て去り、政治権力によっては決して与えることのできない、大地とのこの精神的なつながり——それは自己の双腕を酷使することではじめて得られるものである——の中でひたすら生きようとする姿勢のことを指していると思われる。木下は、村民らのこうした姿勢のうちに、彼自身の中で萌芽え始めていた政治そのものに対する疑念のより能動的な、完結した姿を見たのである。そのことが、彼を政治の現実に対する否定から、政治そのものの否定へと進ませる一つの契機となったのではないだろうか。

また、さらに言えば、木下は政治から「超脱」し大地との「恋人」のような紐帯の中で生きようとする谷中村民の姿勢こそ、人間にとって最も望ましいあり方であると悟り、そうしたあり方に対して、政治が本来的に無力であるばかりか、むしろそれを阻害しかねないものでことに気づき、そのことが彼の政治に対する否定的な見方を決定づけた、とも考えることができる。そのことは、

前掲の「破壊の前夜」の一節において、彼が政治権力を、「生命」の対極にある「死滅」をもたらすものと位置づけていることから明らかである。このように考えると、彼の政治そのものに対する否定的な見方の進展は、単に従来の理想的な政治観の崩壊ないし挫折という消極的な性格のみを有する過程ではなく、新たな価値観の形成、あるいは理想の獲得という積極的な側面をも含んだ過程であったと言えるだろう。

五、おわりに

本稿では、明治三九年の中頃を境とした、木下の政治に対する見方の変化の内実を明らかにするとともに、明治三九年から翌四〇年にかけて展開した谷中村破壊事件が、その変化にどのような影響を及ぼしたのかを考察してきた。そして、その考察の過程では、木下が用いた「超脱」、「労働」、「生命」といった言葉の意味を明らかにし、彼にとって、明治三九年半ばを境とした政治観の変遷が、単に、彼独自のキリスト教理解・信仰に根ざした従来の理想的な政治観の挫折という消極的な性質のみを有するものではなく、同時に、新たな理想の獲得の過程でもあったことを指摘した。

以上の考察からは、木下にとって谷中村事件との関わりが、単に彼の社会的活動の履歴の中の一項目と見なされるべきもので

はなく、思想上の転換をも迫る極めて重大な出来事であったことがわかる。また、そのことは、彼が現実社会の様々な事象と向き合う中で自らの思想を形成した、現実主義的な実践的な思想家であったことを意味するだろう。本稿で触れた木下独自のキリスト教理解・信仰も、彼のそうした傾向と密接に関連するものであると思われる。

*本稿における木下尚江の著作からの引用はすべて、山極圭司、後神俊文、清水靖久他編『木下尚江全集』（教文館、平成二年（一三年、全二〇巻））による。なお、引用の末尾に付した数字は「巻数・頁数」を意味する。

注

- (1) 例えば、明治三十九年七月に書かれた「告白をもて序に代う」（『良人の自白 続編』金尾文淵堂、明治三十九年）には、「予は回顧して最早や偽善修飾の歴史を継続するの痛苦に堪ゆること能わざる也、予は過去の生活より全然脱却せざるべからず」（二・二四三）と述べられている。

- (2) 明治三十九年二月三〇日、金尾文淵堂発行

- (3) 山極啓司『木下尚江』（昭和三〇年一二月、理論社発行）に、「年少の頃から修養の道を志して、老荘孔孟、仏教、キリスト教、その他様々な思想、哲学を学び、明治三十二年、アメリカへ渡

り、更にヨーロッパをも歴遊して数年間の研究実験をつみ、帰国して東京に出て、静坐法の伝道を始めた」とある。

- (4) 新共同訳による。

- (5) 彼にとって、現実社会の上に実現されるべき理想世界とは、共産主義社会であった。（二六・一六一、三一四、二〇・四六―七）その内実がいかなるものであるかは別の機会に考察することとしたい。

- (6) 『基督教世界』一〇一九、一〇二〇号、明治三十六年三月五、二二日

- (7) 『護教』第六九三号、明治三十七年一月五日

- (8) こうした木下の政治重視の考え方については、彼を含めた明治三〇年代の社会主義者たちが、あくまでも既存の国家体制の枠内で、議会における立法活動を通じて漸次的に社会主義の実現を目指す議会主義の立場をとっていたことを踏まえる必要があるだろう。その議会主義の立場は、木下が安部磯雄、幸徳秋水、片山潜らとともに創立メンバーの一人として参加した日本初の社会主義政党である社会民主党（明治三四年結成）の宣言書（安部起草）に、「吾人は……有力なるべき立憲政体を有せり。若し此等の手段を利用して吾人の抱負を実行せば、何ぞ白刃と爆裂弾との助を借るが如き愚を為すを要せんや。吾人が茲に政党の組織を為す所以のものは即ち文明的手段たる此等の政治機関を利用せんとするに在り」（『太田雅夫』『初期社会主義史の研究』――

明治三〇年代の人と組織と運動——』（新泉社、平成三年）一一〇頁」と明確に表明されている。

なお、初期社会主義者たちが有していたこの議会主義の立場に動揺が生じるのは、明治三八年十一月に渡米し、翌年六月に帰国した幸徳秋水によつてであつた。彼は帰国直後の六月二十八日、日本社会党の演説会において「世界革命の潮流」と題する演説を行い、その中で従来の議会主義の方針を批判し、労働者による総同盟罷工（ゼネラル・ストライキ）を手段とする直接行動論を提唱したのである。この直接行動論とは、労働者が社会の一切の生産・交通機関の運営を停止することで資本家階級に直接打撃を与えることを目論む急進的な革命論であり、従来の議会活動による平和的改革路線とは大きく異なるものであつた。

〔糸屋寿雄『幸徳秋水研究』（青木書店、昭和四二年）二二一～二二頁〕

『新紀元』第一号、明治三八年一月一日

『新紀元』第三号、明治三九年一月一日

〔臨終の田中正造翁〕『神 人間 自由』、昭和九年九月、中央公論社発行他

彼はこの職務怠慢を「曠職」（一・五三、五四、六九等）と呼ぶ。

『飢渴』、明治四〇年四月、昭文堂発行

注(11) 参照

『毎日新聞』、明治三三年九月三〇日

(18) (17) (16)
『毎日新聞』、明治三四年三月二日
『毎日新聞』、明治三三年一月一九日～一二月二日
『理財新報』一卷一号、明治四〇年一月三日

（その・たつや 人文社会科学研究所
哲学・思想専攻）